

【研究報告（2018年度）】

チーム② 学童期・思春期の学校適応支援・活力ある人間形成の研究チーム（②-1）
「生きる力」が育つ学校文化を創る

皿田洋子^{*1)}、徳永 豊¹⁾、松永邦裕¹⁾、本徳勇氣¹⁾

1) 福岡大学人文学部、*）チーム責任者

要 旨

本事業は児童・生徒の適応にかかる諸問題の背景にある対人関係の希薄さ、問題への処理能力の乏しさ、さらに自尊感情の低さを臨床心理学的な方法論である **Social skills training**（以下、**SST**）を実施して学校生活を充実させる活力をつけようとする取り組みである。2017年に開始し2年を終了した。この2年を振り返ると小学生は**SST**の目的の理解が深まり、練習したことを忘れずに学級で、放課後に、家庭で実行するようになってきている。また、**SST**の中で「よいところを見つける」ことを繰り返すことが功を奏して、友達のよいところを見つけることが自然にできるようになった。そうした変化は社会的スキル尺度、自尊感情尺度にもあらわれている。担任にも**SST**授業の観察を通して“しっかりよいところをほめる”ことの大事さへの気づきがあった。

中学校では学校のスケジュールの問題で1回しか実施できなかった。中学生に向けた取り組みにはさらなる工夫があることが判明した。

1. 緒 言

今の子どもたちが抱える問題の要因には、人間関係の希薄さ、問題への対処力の乏しさ、援助希求が乏しく一人で抱え込む、人も自分も信じられないなどがあげられる。本事業は、こうした点を**SST**によって改善し、学校生活がすべての子どもが楽しく過ごせる場であるようにと2017年から3年計画で開始した。**SST**を2年間体験した子どもたちにどのような変化がみられたか、担任の先生たちが**SST**をどう評価されているかなどについて検討してみる。

2. 方 法

1) 対象

- ・F市内A小学校5年生全クラスの150名
- ・F市内B中学校2年生全3クラス120名

2) 方法

SSTの実施の流れ

各教室において、一斉に実施。実施者は訓練を受けた人文学部教育・臨床心理学科の学生、大学院生で小学校は3人一組で45分、中学校は、

2人一組で50分実施した。

練習の流れは、以下の通り

- ① インストラクション
- ② ターゲットスキルのモデリングの提示
- ③ ロールプレイを用いた練習
- ④ みんなでよかった点を発表
- ⑤ さらによくする点をみんなで考える
- ⑥ もう一度改善点を取り入れて、ロールプレイを用いた練習
- ⑦ みんなからよかったところを発表
- ⑧ 練習したことを実際に学校や家庭で試みる

評価

「社会的スキル尺度」と「自尊感情測定尺度」

3. 研究結果

1) 実施回数

小学校：1学期に2回、2学期に2回、
3学期に1回実施

中学校：1学期に1回のみの実施

2) 実施したターゲットスキル

小学校：1学期：自分の気持ち、考えを

はっきり伝える

2 学期：上手な頼み方

3 学期：上手な断り方

中学校：1 学期：職場体験でわからない
ことの尋ね方

3) 効果検証

「社会的スキル尺度」と「自尊感情測定尺度」を用いて効果の検証を行った。1 年間の変化をみるもので、今回の報告は 4 年生の時に実施した 1 年目の結果である。なお、中学校のデータは、学校の都合で計画通りに行えなかったため、小学校のみの報告となる。

「社会的スキル尺度（小学生版）」15 項目の 1 年間（4 年生）の変化をみると、「友だちが失敗したら、はげます」「友だちのたのみをきく」「あいての気持ちをかながえて話す」の 3 項目に改善が認められた。「自尊感情測定尺度」22 項目の 1 年間（4 年生）の変化では、「私は人のために力をつくしたい」「私は他の人の気持ちになることができる」「私には自分のことを理解してくれる人がいる」「自分のことをみまもってくれているまわりの人々に感謝している」「私には自分のことを必要としてくれる人がいる」の 5 項目に改善が認められた。

4) 担任の先生からの評価

学年末の 3 月に担任 5 名に個別に 1 年間の SST をふりかえってもらい、15 分の半構造化面接を実施した。その結果、「喋る子が喋らない子に声をかけたり、誘うようになった」「グループ活動で意見を言えるようになった。」「SST を楽しみにしている」「帰りの会でよかったことをみつけるのがうまくなった」などポジティブな変化が語られた。また、担任自身についての気づきとして、「学生さんの関わり方を見ていて、やさしく接してないことに気づいた」「自分は高いものを要求しすぎていた」などが語られた。

4. 考 察

児童・生徒について

小学校では 2 年目ということで生徒は非常に積極的に練習に取り組んでいた。担任の先生の協

力もあって、グループ決め、会場づくりがスムーズに行え、SST の時間の確保がうまくいった。前年度の反省からすべての生徒にロールプレイに参加してもらうという課題がクリアできた。ターゲットスキルをひとつに絞って何度も繰り返しロールプレイを行ったことで練習したことが印象づけられたようで、宿題の実行率も高くなった。

社会的スキル尺度、自尊感情測定尺度を用いた評価の結果から、練習したことが生かされ、自信、自尊感情の向上に役立っていることが認められた。

4 年生の担任のインタビューから SST は子どもどうしの関係性の深まりに役立つことが明らかになった。難しいことに取り組むのではなく、みんなができることを取り上げていったことで、すべての子どもに何らかの自信をつけたようである。そしてそれが学校生活の中に少しずつ生かされていることから、SST の有用性が確認出来た。

2 年度を振り返ると、小学校では学生の指導力も向上し、子どもたちも SST を実生活に取り入れており、ほぼ当初の狙い通りであった。

しかし、中学校では 1 回しか実施できなかった。その理由として中学校側から 2 年生は年間行事が詰まっていた時間がとれないとの回答があった。4 月に校長が変わり十分に研究の意図が伝わっていなかったことも考えられ、研究の主旨をあらためて説明すべきだったことが反省点としてあげられる。

5. 結 論

SST では日常の学校生活でみられる具体的な対人場面を、すべての子どもが練習する。この方法がスキルの獲得を促し、それによって自信、自尊感情の向上をもたらすといえる。

6. 研究発表

学会報告

皿田洋子「生きる力」が育つ学校文化を創る取り組み—Social skills training— SST 普及協会 第 23 回学術集会 in 札幌 2018 年 11 月 3 日